様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１８日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０４６６
研究課題名（和文）　山田孝雄・小林好日を視座とした近代日本語学確立過程の学史的研究

研究課題名（英文）　Research on the Establishment of Japanese Linguistics as a Discipline in the Early Twentieth Century viewed through the Contributions of Yoshio Yamada and Yoshiharu Kobayashi

研究代表者
齋藤　倫明（SAITO MICHIAKI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１７８５１０

研究成果の概要（和文）：本研究は近代日本語学の確立期において、日本語研究の体系に大きな影響を与えた「大家」（大学者）の研究者として山田孝雄を、学問を徐々に展開させた「普通」の研究者として小林好日をとりあげ、この２人の学問の形成、当該期における他の研究との影響関係を検討しながら、近代日本語学の確立期における位置づけを試み、近代日本語学の確立過程の一端を明らかにするものである。とくに、文法論の構成・方言研究の方法についての位置づけ、および日本語史研究の史的展開について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The goal of the following research is to clarify the establishment of Japanese linguistics as a discipline in the early twentieth century. Two renowned pioneers in the field of Japanese linguistics, Yoshio Yamada, a “big shot” in the field, who’s groundbreaking work heavily influenced Japanese linguistic methodology, and Yoshiharu Kobayashi, an “average” scholar, who helped to slowly expand the scope of the discipline, are analyzed, and the contribution of the two scholars on the establishment of the modern discipline as well as their influence on the work of other scholars of the same period is clarified. A particular emphasis is placed on the formation of Japanese grammatical theory and dialect research methodology, as well as the chronological development of research in Japanese historical linguistics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語学史、文法研究史、方言研究史、日本語史研究史

１．研究開始当初の背景

現在における日本語研究がなぜこのようにあるのか、ということを考えるためには、近代における日本語研究がいかに確立してきたかという点を考えないわけにはいかない。しかし、日本語学史研究は、これまで近代以前の研究、江戸時代の国学者の研究が中心に行われてきており、近代に生まれ西洋言語学の影響を受けつつ展開した日本語研究

についての学史的研究の蓄積が積み重ねられているとはいえない。

これまでの近代における日本語研究の学史的研究の多くは、日本語研究の体系に大きな影響を与えた研究者（大学者）についての検討が中心であった。確かにその点は重要であるが、それは学史的転換点というべきものである。学問というものは徐々に展開していく側面も重要なのであって、この側面に目を向ければ、むしろ学問を徐々に展開させた、いわば「普通」の日本語研究者がいかなる研究を進め、それが日本語研究をどのように展開させていったのかということを考えることも必要である。また、大学者への言及であっても、転換点としての事跡を高く評価することが中心課題であって、そのような研究が同時期において、どのような位置づけになるのか、いかなる意味で転換点だといい得るのかという点の検討は十分であったとはいえない。

また、現在、大学者とされている研究者が、いかに大学者として評価されるにいたったかという検討も十分ではなく、このような点を明らかにするためには、同時期の学的状況を把握し、「普通」の学者の研究動向と対比していくことが求められる。

しかしながら、近代の日本語研究は、国語科学講座（明治書院）の刊行、国語学会の設立などから考えて、昭和初期～戦前期が体系的確立期と考えてよいと考えられるが、近代日本語学研究の萌芽期から確立期にかけての研究は多くない。

近代全体の傾向がわかる成果としては、福井久蔵『国語学史』、時枝誠記『現代の国語学』、東条操『国語学新講』などがあるが、近代日本語学確立期の状況が十分把握されているとはいえない状況である。

また、近年政策史的観点から、日本語研究者に言及した著作がみられる。イ・ヨンスクが保科孝一に、安田敏朗が時枝誠記・佐久間鼎らに言及する。これらの研究者に言及した点では注目されるが、日本語研究の研究動向と意義づけという点からはかなり離れている。

これまで山田孝雄・橋本進吉らの大学者の研究については、種々の研究があるが、これまでは文法体系への言及などが中心であって日本語研究の確立期における研究動向を踏まえた位置づけについての研究はほとんどない。釘貫亨や安田尚道などは、山田・橋本の意義づけや学問形成の基盤の一端を検討しているが、このような研究が今後さらに必要であると考えられる。

また、「普通」の研究者の研究として、小林好日の学史的意義づけについて、これまで一定の成果をあげている（平成 18～20 年度科研費「小林好日を通して見た近代日本語学確立期の学史的研究」（研究代表者：斎藤倫明）では、）が、小林の残した諸資料に基づいた学的形成や同時代的な影響関係把握などの点で、さらに検討すべき点はあることが明らかとなった。このような研究が今後さらに必要であると考えられる。

このように、近代日本語学研究の萌芽期から確立期にかけて、日本語研究がいかに確立していったのか、その状況にあった研究（者）がどのように位置づけられるのか、という近代日本語学確立過程の学史的研究を進めることが求められているといえる。

２．研究の目的

そこで、本研究はこれまで手薄だった近代日本語学の確立期における学史展開の研究を、山田孝雄・小林好日の２人の学者の事跡の検討を通して行うものである。日本語研究の体系に大きな影響を与えた「大家」（大学者）の研究者として山田孝雄、学問を徐々に展開させた「普通」の研究者として小林好日をとりあげ、この２人の学問の形成基盤、当該期における他の研究との影響関係を検討しながら、近代日本語学の確立期における位置づけを試み、近代日本語学がいかに確立されたのか、当該期がいかなる時代であったのか、その一端を明らかにする。

具体的には、近代日本語学確立期における日本語学者のひとりで、日本語文法論、日本語史、東北地方の方言研究及びそれらを総合した研究成果を残した、小林好日（東北帝国大学教授、1886-1948）に一方の焦点をあてて、この小林好日の日本語学研究の成果の位置づけを行うことによって、近代日本語学がどのように確立されてきたのかを検討する。同時に、近代日本語学草創期から確立期にわたって活躍し、日本語文法論や日本語史研究において、研究の体系に大きな影響を与えた山田孝雄（1875-1958）に、もう一方の焦点をあてて、近代日本語確立期における山田孝雄の位置づけを明らかにすることをも目的とする。

このように、この２人を軸にして、多面的な検討を総合的に行うことによって、近代における日本語研究がいかに確立されてきたかという過程の一端を明らかにしていく。

３．研究の方法

本研究においては、次の(1)～(3)を進める。

(1)小林好日の研究内容及び小林が受けた影響を明らかにする。

上記科研費の成果を受けて、さらに小

林の講義ノートの内容の検討から研究動向を、受講ノート・研究ノートなどから、同時代からの、また西洋言語学等からの影響をさらに明らかにしていくことができると考えられる。また、小林の方言研究についても、通信調査票の内容や調査方法などをさらに検討していくことにより、小林の研究内容、学問形成の基盤を明らかにしていく。

(2) 山田孝雄の言語研究の成果を整理し、山田の受けた影響および山田が同時代に与えた影響とその展開を明らかにする。

山田のきわめて多い著作を整理し、文法論も含めて山田の日本語研究がいかなるものであったのか、いかに展開したのかを明らかにする。山田は国学的思想家として理解されるが、同時に西洋近代学問からの影響関係もあると考えられるため、山田の言語研究が形成された思想的背景についても検討する。また、山田が同時期の研究に与えた影響、またその展開についても検討する。

(3) 当該期における周辺の研究の動向を把握しながら、小林・山田の位置づけを行いつつ、日本語学確立の動向を明らかにする。

４．研究成果

(1) 文法研究史における文法論の組織とその位置づけ・陳述論の展開

文法論においてどのような研究部門が設けられるかということと言語単位の認定・扱い方には大きな関係があり、この視点から文法論の特徴が明らかになるといえる。この点で、山田文法をはじめとした文法論が、語構成論および文構成論においてどのように位置づけられるのかを、それぞれの文法論の論理を検討しながら明らかにした。

①語構成論

語構成論については、文法論における語構成論の存在条件を考えると次の 4 点になる。

(i) 文法論に単位体の探求という側面を認めること
(ii) 語という言語単位を設定すること
(iii) 語構成要素に相当する言語単位を設けること
(iv) 言語単位間に軽重の差を設けないこと

山田文法においては、「一の語」を「文法研究の一切の基礎」とすることからすると、論理的には単語・合成語の内部の検討は不要ということになり、語構成は扱うことができないはずである。しかし、語の運用論の第一部門として語構成論を設定しており、矛盾をはらんでいるものであった。また、語構成論の存在条件について、他の文法論についてもまとめ、山田文法を含めた諸文法論の語構成論の扱いの位置づけを示すと、次のようになる。

文法論	i	ii	iii	iv	語構成論の有無
松下文法	○	×	×	○	無
橋本文法	○	○	○	○	有
教科研文法	?	○	○	×	△
渡辺文法	○	○	×	?	無

②文構成論

山田文法には「語の位格」において文構成が論じられることが期待されるが、実際には厳密な意味での文構成論は見られない。山田は連語を語の一種とみなすことから、語の結合関係という観点が生み出されなかったと考えられる。

一方で、松下文法の「詞」の扱いは、これに近い側面をもつが、詞と詞の相関論という文構成論をもつ。ただし、その考え方は「詞」の「本性論」、すなわち、いわゆる品詞論にゆがみを生じさせることになっている。また、橋本文法においては、文節（広義・狭義）・連文節という概念を設定するため、山田・松下に見られるような問題はおこっていない。

もっとも、その場合、語と文節の関係をいかにとらえるのか、ということには後世の研究を俟たざるを得なかった。

③陳述論

山田孝雄はヴントの心理学を援用した「統覚作用」に文の成立を求めている。これは、文を構成する形式要素には還元しておらず、あくまでも意味の側から文を規定したものである。また、統覚作用という 1 元的な文成立論だといえる。

しかし、山田以後の研究は、この流れを必ずしも受け継がなかった。時枝誠記は、文を構成要素によって説明せず、統一体としての文の性質を明らかにしたとするが、実質は助詞助動詞、終止形という形式面に文成立を求めたものであった。渡辺実は構文的職能をもつものが単語であるとすることから、一定の形式が文成立に関わることにならざるを得ず、用言述語の終止形・イントネーション、第 3 類の助動詞（いわゆる不変化助動詞）、終助詞に陳述を託すことになった。この点では陳述という 1 元的な文成立論ではあったが、

第3類の助動詞と終助詞とを別のものとみた芳賀綏によって文の多元的成立論へ変質していくことになった。
　金田一春彦の不変化助動詞の理解には、1元的な文成立論にいたる可能性はあったものの、結果としては、1 元的に文を規定する考え方から離れていく機縁になった。

(2)方言研究理論の位置づけ

　小林好日の方言学の学史的位置づけを明らかにするために、『方言語彙学的研究』等の著作と昭和10年代における通信分布調査について検討した。小林好日の方言研究は、西洋の方言学を十分に消化しそれを日本語方言に適用したものであり、特に言語変化の理論面での貢献が大きいと評価される。とりわけ、方言周圏論により名を馳せた柳田國男の方言学がある意味随想的な雰囲気を漂わせ、また、民俗学的な色彩が強いのに対して、小林の方言学は理論面での整備が進んでおり、より言語学的な考察が行き届いたものとなっている。その点で、のちの方言地理学隆盛時代の基盤は、思想的には柳田が導いたものの、具体的には小林が築いた部分大きいと考えられる。3度にわたる東北地方通信調査も、方法論の面で画期的であったと位置づけられる。

(3)日本語史研究の展開

　日本語史研究ほうが記から確立期への展開をまとめると、次のようになろう。

①明治40年頃まで
　日本語史研究草創期：国学の成果から大きく出る程の成果はない。国語沿革教授の必要から教科書として、山田孝雄らによって簡略な概説書が編まれる。
②大正時代
　時代別文法の成立：山田孝雄の『奈良朝文法史』『平安朝文法史』『平家物語の語法』が刊行される。文法史研究がまずは先行し、通史を目指して進む。山田孝雄を中心とした展開が見られる。通史指向は『口語法別記』にもある。
③昭和一桁（前半）
　新資料による中世語研究の進展：橋本進吉『吉利支丹教義の研究』、湯澤幸吉郎「天草版平家物語の語法」、湯澤幸吉郎『室町時代の言語研究』などが著された。それまでに紹介のあった資料の整備が進む。記述の中心は文法であるが、音韻史の記述もはじまる。
　音韻史研究草創期：
④昭和一桁（後半）
　はじめての国語史概説：吉沢義則の『国語史概説』が刊行される。内容はトピック的なものである。この時点では通史的記述は難しかったのではないか。
　時代別記述シリーズ：国語科学講座の国語史学が刊行される。次期の刀江書院の国語史シリーズへ続くもので、通史の成立基盤となる。
⑤昭和10年代前半
　通史の成立：湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究』で、文法史に近世が加わる。刀江書院国語史シリーズにも近世篇がある。小林好日『日本文法史』は、本格的な文法史通史。通史を目指した文法史という点では、小林によって一旦成立したといってよい。また、今泉忠義『国語発達史大要』も出た。『万葉集』研究の進展で上代語の記述も進む。
⑥昭和10年代後半
　それまでの成果をまとめた専門書（論文集）がいくつも出版される。湯澤幸吉郎『国語学論考』、小林好日『国語学の諸問題』、有坂秀世『国語音韻史の研究』など。

　日本語史研究は、上田万年のマニュフェスト以降、草創期までは国学の成果にとどまっていた。また、歴史的側面としては比較言語学の影響を受け、系統論への興味が大きかった。しかし、明治 40 年代には系統論への期待が縮小し、実証的な日本語史研究への指向が強まる。そのような流れを受けて、大正期に入り山田孝雄を中心に文法史が展開する。他の分野に先駆けて文法史研究が先行した。昭和一桁年の前半から新資料の紹介・整備を受けて中世語研究が展開しはじめる。音韻史研究も橋本進吉の成果が生まれ展開をはじめる。昭和 10 年代にはいると近世語研究が進展するとともに通史が可能になる。小林好日は文法史通史を描き、国語科学講座など時代別の歴史も盛んになった。今泉・湯澤が10年代後半に音韻なども含めた通史を描いた。昭和にはいると、それまでの蓄積もあったのか、日本語史研究が一気に展開する。昭和に入ると 5 年程度で画期することができるが、この時期の日本語史研究は、かなり急激な展開があったとみてよいだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①小林隆、方言形成論の到達点と課題―方言集圏論を核にして―、東北大学文学研究科年報、査読無、第61号、2012、28-64
②大木一夫、事態を描かない文・素描、東北大学文学研究科年報、査読無、第 61 号、2012、1-27

③小林隆・澤村美幸、言語的発想法の地域差と歴史、国語学研究、査読有、第 49 集、2010、1-14
④斎藤倫明、言語単位から見た文法論の組織―山田文法を出発点として―、山田文法の現代的意義、査読無、2010、31-51
⑤大木一夫、文の成立―その意味的側面―、山田文法の現代的意義、査読無、2010、75-96

〔図書〕（計１件）
①齋藤倫明・大木一夫編、ひつじ書房、山田文法の現代的意義、2010、314

〔その他〕
ホームページ等

http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokugogaku/yamada.html

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤　倫明（SAITO MICHIAKI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１７８５１０

(2)研究分担者
小林　隆（KOBAYASHI TAKASHI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：００１６１９９３
大木　一夫（OKI KAZUO）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：００２５０６４７
甲田　直美（KODA NAOMI）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：４０３０３７６３

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：